



医療法人近森会

発行 ● 2006年11月25日

# びるっば 12

Vol.245

www.chikamori.com 〒780-8522 高知市大川筋一丁目1-16 tel.088-822-5231 fax.088-872-3059 発行者 ● 近森正幸 / 事務局 ● 川添昇

## 近森病院

# センター機能スタート

近森病院院長 近森正幸



### 地域の医療計画の見直し

地域の医療計画の見直しにより、疾病ごとの地域医療計画がつけられるようになり、近森病院では循環器や脳卒中などのセンター機能がスタートすることになった。これにより、患者さんはもちろん、かかりつけの先生方や救急隊員の皆さんにも、近森病院の医療機能が分かりやすくなると思われる。

### 四つのメインセンター

近森病院においては、2002年10月にはハートセンターがCCUに設置されたが、新たにメインセンターとして、脳卒中センター、消化器病センター、外傷センターが、重症患者の受け皿としてICUに設置されることとなった。

一方、一般病棟では後方病棟として、脳卒中は新館6階フロア、消化器病は新館5階フロア、外傷は新館3階フロアがおもに担当することになる。従来からのCCUのハートセンターは新館4階フロアが後方病棟として機能している。

### サブセンター

近森病院の医療機能は多岐にわたっており、メインセンター以外の重要な機能として、画像診断センター、内視鏡センター、腎透析センター、形成外科センター、呼吸器気胸センターのサブセンターが近森病院の医療機能を補完することになっている。

以上のサブセンターの他に、リハビリテーションセンターと栄養サポートセンターは、チーム医療の中心をなしており、これが近森病院の医療機能の大きな特徴となっている。

### 地域で必要とされる医療を

近森病院は、地域で最後の最後まで必要とされる生命にかかわるような医療を、緊急を要する四つのセンター機能に絞り込んで実践していく。



ハートセンター  
脳卒中センター  
消化器病センター  
外傷センター

画像診断センター  
内視鏡センター  
腎透析センター  
形成外科センター  
呼吸器気胸センター  
リハビリテーションセンター  
栄養サポートセンター

CHIKAMORI HOSPITAL

各センターが順調に統合されて機能することにより、近森病院の医療が地域の皆さまによく理解され、センターとしての真価が発揮されることと確信している。

## フランスの田舎巡り

近森 正幸

この数年、夏休みを利用してフランスの田舎巡りを夫婦で楽しんでいる。花の都パリにはない、目が合うと会釈してくれる人間の素朴さのなかに歴史と生活の豊かさがある、フランスの田舎が好きになって、旅のスケジュールをたてるようになった。生きていく上でなにが大事かを教えられ、そんなフランス人に逢って話をするのも気持ちのいいものである。



今回はフランスとスペイン国境のバスク地方からピレネー山脈を越え、年間600万人の巡礼が集まる奇跡の聖地ルルドや、ロートレック美術館がある赤いレンガの町アルビ、やは

り巡礼の地であるロッカマドゥール、カオールのシャトーホテル、中世の教会・モアサック、トゥルーズの町を巡った。

大西洋岸は格式のある避暑地になっているが、聖ジャックの道で知られる古くからの巡礼地でもあり、古い由緒ある教会がたくさんある。

山のワイン・イルレギー、白が楽しいジュランソン、黒のワイン・カオール、歴史のある白・赤ともに個性豊かなガイヤックなど、行ってみたいはじめて訪ねた地がフランス南西地方の個性あるワイン産地であることに気がついた。

一つ星、二つ星のレストランで毎日フランス人以上に盛り上がり、地元のワインと食事をリラックスして楽しめたことは、大きな喜びだった。

(理事長・ちかもり まさゆき)

第35回  
地域医療講演会

## CTによる冠動脈疾患の診断

東京医科大学第2内科(循環器内科)教授 山科 章 先生をお迎えして、2006年10月27日、高知会館で

近森病院 副院長 浜重 直久



▶ 講演を終了し山科教授を囲み、左に挨拶に立った近森理事長、右には司会進行を務めた浜重副院長

▼ 第103回日本内科学会講演会の教育講演資料より



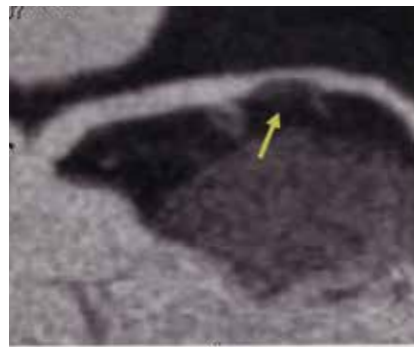
狭心症や心筋梗塞の診断には、運動負荷心電図や心筋シンチ・心エコー図などの検査でも重要な情報が得られますが、カテーテルを用いた冠動脈造影により狭窄の部位や程度を直接評価することが重要です。しかし、近年CTの進歩により、**非侵襲的に冠動脈病変の情報を比較的簡単に評価することが可能になってきており、当院でも、11月に最新の64例マルチスライスCTの導入が予定されています。**

これを機会に、豊富な経験をお持ちの東京医科大学副院長、山科章先生におこしいたご、"CTによる冠動脈病変の診断"と題してご講演をお願いしました。院内外から100人近いご出席をいただき、鮮明な画像の多数のスライドを用いて、狭窄部位の検出や病変部の性状評価など、この分野でのCTの進歩をわかりやすく説明していただきました。

当院では、年間約1600例の冠動脈造影を行っています。冠動脈疾患の可能性の低い症例での除外診断や、バイパス術後・ステント術後のフォロー



▲ VR (Volume Rendering) 画像



▲ CPR (Curved Planar Reconstruction) 画像

▲ 図 左冠動脈前下行枝のソフトプラークによる75%狭窄の症例

アップなどで、CTで代用できる症例も少なからず存在するものと思われます。しかし、カテーテルによる冠動脈造影には、風船療法やステント術など治療に直接結びつくというメリットもあり、両方の検査をうまく使い分けることも重要かと考えています。

山科先生には、当院循環器科に三人の若手医師を派遣していただくなどたいへんお世話になっています。循環器の各分野で指導的な役割を果たしておられ、今後ともいろんな面でご指導をいただければと思っています。

アツという間に今年もまた門松の準備の季節になりますねえ～



## 聴診器

我が家の年中行事の一つに夏の締めくくりとして、「家族全員」が参加するキャンプがある（「全員」だから、皆の日程を調整することから、すでに楽しくもあり、苦労も多い！）。

今年も砂浜がとても綺麗な大岐ノ浜へ行くこととなったが、台風接近情報もあり、サーファーにとってはいい波のようで大会が行われていた。

八人の大家族が集合し、まずそれぞれの家族用テントを張ることから作業開始。アウトドア大好き人間の長男の手ほどきによって、「そうじゃない、こうかな、こっちな」などと、ワイワイがやがや。そのうちに、4個のテ

## 緊張も大事、そして弛緩はもっと…

トが次々と形作られ、孫たちは大はしゃぎだし、もっと「嬉しがって」いたのは、大人たちかも知れないけれど…。

波の荒い海に入り子ども達以上に親たちが思いっきり楽しんでいるように見えた。日常生活の場所を離れ、身体を動かすことで普段のストレスを吹き飛ばし、明日への活力を思いっきり蓄えているようだ、子ども孫もそれぞれが成長しているんだ、と頼もしく感じた。

釣りにも挑戦したが、馬鹿な魚はい



なかったようで…。夕食はコンロを囲んで皆が言いたい放題、家族だから許せるアレヤこれヤ。ここでもまた明日への活力を蓄えること、しきり。

お釜で炊いたご飯には私のこだわりがあり、ちよっぴりおこげが混ざり我ながら自慢のできる炊き具合となった。

小さな家族のほんのちょっとした幸せを感じることができた一日。こういう気分が味わえるからまた明日から頑張ろうと思えるんだ～と、緊張ばかりではなく弛緩の大事さも確認させられる夏の締めくくり年中行事は無事お開きとなった。(近森リハビリテーション病院副院長兼総看護師長 田村キミ子)

## 医療安全セミナー（2006.11.02）のご報告

## 現場にお持ち帰りできて日常ケアで使える中身

近森リハビリテーション病院  
医療安全担当看護師長

寺山みのり

今回、「安全に食べるために」をテーマに講義と演習で2時間のセミナーを開催しました。講義は「摂食嚥下障害の基礎知識 (Dr)」「安全に食べるための取り組み (Ns)」「安全に食べるための呼吸 (PT)」「安全に食べるための姿勢 (PT)」の4つで、口リハとは違う趣向で“安全”をキーワードにすることに配慮しました。

参加者は269名(法人内71名・外部198名65施設)で、看護師40%、介護職16%、セラピスト23%、その他、医師、歯科衛生士、栄養士等でした。

今回、私たちが大切にしたのは、①当院の持ち味を活かすこと、②急性期から維持期までの共通したニーズ、③現場にお持ち帰りできて日常ケアで使える中身、④参加者と講師、運営スタッフが一体化した参画感の4点でした。

セミナー後のアンケートでは、「講義内容の理解」「講義方法(教材・プ



▲まずは舞台上で前田秀博科長によるお手本

レゼン)の解かりやすさ」について、80%以上の方々に「良い・大変良い」の回答をいただき、「普通」を合わせると99%の方々から好評をいただきました。

とくに呼吸と座位の演習は、「患者さまの気持ちが理解できた・実際にやってみてわかった・現場ですぐ使え



▲実際にやると、なご分りやすいと好評でした！右は松木秀行リハ部長

る」等の感想が多く、スタッフ一同、ほっと一息つくと同時に、院内での安全なケアの定着と、地域との連携を考えた夜でした。

## 院外エッセイ

## 田舎暮らしのお裾分け

筒井 征子

ついつい せいこ。昭和17年4月19日、土佐町生まれ。昭和38年～高知県生活改良普及員。平成15年に嶺北農業改良普及センター所長で退職。平成17年8月、農泊「みのりの舎(や)」を開業。地域活性化を目指した地元組織「いきいき寺野」事務局を務めるなど地域活動に積極的に参画する毎日を送っている。

スーパーも遠い、お医者も遠い、これまで付きあってきた友だちも遠い、バスが一日二往復しかない所が私の第二の生活の場所である。

不便とはいえ、現在も34世帯が生活しているし、87歳から90歳の一人暮らしのお年寄りたちが、畑で毎日のように野菜をつくり、移動スーパーで買い物をし、バスとタクシーで病院通いをしながらも元気で暮らしている。

こうなったら、町ではできない暮らしを楽しもう！家の後ろはお宮、前は川、まわりは雑木に囲まれた杉の木の平屋の家。ついでに囲炉裏もつくって、ゆったりとした空間で、お茶を飲み、川のせせらぎと小鳥の声を聴きながら昼寝をし、のんびり過ごす。そんな老後もあってよい！と田舎暮らしが始まった。

夫とふたりで食べるだけの米と野菜をつくり、それに味噌、コンニャク、豆腐、うどん、里芋の煮っ転がしや芋粉の餅などの郷土料理などなど、大先輩(自分ももうすぐ高齢者に属する年齢だが、地域のなかでは新入りの半人前)たちに教を請いながら暮らしている。

そんな折、ひよんなことから、いま



流行りのグリーンツーリズムとやらで、「農泊」(下の写真)をすることになった。お客さんに、自然の恵みを心と身体で味わって欲しいとの思いから、地域にあるもの探しが始まった。



春はウド、タラ、イタドリは無論のこと、ギボウシ、ノビル、夏はヤブカンゾウの花、蓴、桑の葉、秋はイワジシャ、薺ミョウガやアシタバの花などなど、その気で探せばいっぱいあるものだ。

それに直販所にある地域の食材をプラスし、地域のお年寄りの智慧をいただきながら奮闘している。

のんびりした老後の予定だったが、ぼちちりとはいかなかった。お金をいただき、新たな人に接することで、緊張感と責任が生じ、ストレスにならなくもない。でも、田舎暮らしの楽しさを少しでもお裾分けできれば上等！だと思っている。

## ちょっといい話

本年4月の近森病院心臓血管外科チームの米国研修でお世話になった William Pierce 教授に、入江博之部長がお礼状を出した話は「出張報告記」の写真でもご紹介した(『ひろっぱ』240号)。

ところで、入江部長のもとに楽しいお礼状のお礼状が届いたので、ちょこっとご紹介したい。William Pierce 教授夫人の Peggy さんは、いま話題の腎移植をじつは十数年も前に受けていた！それで、お礼状に貼られた海中遊泳中の姿は、皆さんに勇気を与えられるのでは？



心臓血管外科チームの看護師さんたちが Peggy さんを見習って、「こっそりとゴミを拾うようになった」話では Peggy さんを喜ばせているとか。「日本がより一層キレイになるだろう！」って…。

# 「〇〇出来る」ではなく「〇〇する」。行動してこそ！

援護寮まち施設長

杉村 多代

倉敷中央病院の元看護部長の榎原美恵子さんから「クリニカルリーダー」についてご講演いただいた。クリニカルリーダーとは看護職務の内容と看護者の求められる能力行動特性を規定したものであり、キャリアアッププランの設計図のことである。

概念から実際まで濃縮した内容で、アンケートには「勉強会をしてほしい」「サポートをしてほしい」「まず自己分析をし、目標を明確にしたい」など、すぐに実施することは難しいがやって



みたいと思った人が多く参加者全員大いに感化された。

組織は目的を達成するためにあるが個人が成長することと職務成果を出すことは両輪である、その力となるのがコンピテンシー（能力・行動特性）だと講演の中ではとくに強調されていた。

「〇〇出来る」のではなく「〇〇する」のが大事、行動にならないと意味がないし評価しないと断言する姿に、日頃の自分の姿を振り返り気が引き締まる

講師：榎原美恵子先生



講師の榎原美恵子先生

思いだった。会場からの質問も具体的で、質問者からは今後やってみたくてという強い思いが感じられた。

(援護寮まち施設長 杉村多代)

## 「仕事の報酬は仕事」

栄養科主任 真壁 昇

「ディープナレッジ」、これは言葉や文字にならず伝えにくい知恵、いわば暗黙知だという。当院は近森院長の暗黙知を多くの知的プロフェッショナルが共有し、頭打ちのない組織が成り立つ素晴らしい病院だと思う。私は宮澤栄養科長のスピリットに共感し入職して、近森院長のナレッジがとても好きになり、また川添管理部長に「人材は組織の宝で寿司ネタと一緒に」と言われた一言を今でも重く受け留めている。



この環境での主任任命を厳粛に受け、栄養科の教育担当としてスタッフと共に切磋琢磨して努めたい。また時に私は「バイキンマン」と呼ばれるが、いじめっ子ではない。栄養科はじめ他スタッフに支えられ、その恩返しとして新たな仕事や知恵をプレゼントしている。「仕事の報酬は仕事」で、よい仕事の後に仕事が増えるのは当たり前であり、この過程を経なければ知的プロフェッショナルへの道はないと信じている。多くの仲間達とその頂を目指したい。

## 主任に昇格しました。

乞 熱烈応援

### 「初心表明」

医療福祉部主任心得 川竹 亜子

主任心得とは申しましても、まだまだ経験は浅く、役職のあとを追いかける形で、実力を身につけるために日々奮闘しているというのが実情です。責任ある立場で人をまとめていくということは大変難しいですが、それでも、人と向き合う援助の仕事させていただいている私にとっては、非常に学びになることが多いです。「主任心得」という自分自身に与えられた課題をしっかりと受け止め、向き合って、自分を磨いていきたいと思っております。不慣れなことばかりでなにかとご迷惑をお掛けすること多いかと思いますが、応援してください。



## 大阪道頓堀クルーズと USJ の旅

初日のハイライト、第二寝屋川をはさみ、後方はホテルで全員集合、いざ乗船



チャーター船でいっぱいやりながら…。(田村課長の幸せそうなこと、ぜひ8面の編集室通信もご参照ください・笑)



落語家の案内に一笑い(仕事を離れてなんだかほんわか気分…)

職員旅行 2006

Vol.2

スペースの都合で上下2枚には分かれてましたが…

## リレー エッセイ

## コスモスの伝言

総務課 佐々木 美規



ある日、宿毛市の実家の母から「大月町のコスモスまつりに行きたい!」と電話でせがまれ「仕方ないねえ…」と思いつつも、3歳の娘と久々にふたりで帰省することにした。

「大月コスモスまつり」は4年前にスタート。葉タバコの収穫後の畑に、農家の青年達が種を蒔き、台風や大雨が運んで来る塩害からコスモスを守り生育している。畑は約25haと甲子園球場の約6.4倍あり、畑を見下ろす「むくり山」には「大月ウインドファーム」の風力発電の風車が立ち並ぶ。畑には約2,000万本の大きなコスモスが見えなくなるくらい先まで広がり、想像以上のスケールと綺麗さに、農家の人達のパワーを感じた。

畑で写真を撮ったり、「まるごと苺かき氷」(普段は「道の駅ふれあいパーク大月」で販売。とても美味!)を食したり、母にコスモス絵柄Tシャツを買ってあげたり楽しい時間を過ごした。「本当に来て良かった!」の一言。

夜は四万十温泉「平和な湯」で疲れを癒し、あまり飲めない母が今日は家で私とビールを飲みたいと言うので、娘の相手は父に任せ、母と晩酌することにした。お互いの思い出話や韓国俳優の話、私の面白ネタに涙を流しながらお腹が振れるほど笑った。

いま考えると、コスモス=母で「私に逢いに帰って来て」という母のメッセージだったように思う。そんな可愛い母との関係をこれからも大切にしようと思える貴重な一日だった。そしていつか、母娘三人ビールで乾杯!を夢見ている。

## インターナショナル・ゲストシェフ・プログラム



# 米国人 シェフの 見事な料理を 堪能していただきました

来日された、米国のヘルスケア部門でも料理を提供しておられるマシュー・A・ディッツァー・アラマーク社シェフ、プロダクションマネージャー



準備の段階から皆さまにはたいへんお世話になりました。無事終了し、ホッと記念撮影

10月28日に近森リハビリテーション病院において「インターナショナル・ゲスト・シェフ・プログラム」が行われました。これは当院の給食委託会社 aim サービス株式会社よりご提案いただいた老健、特養、病院などに外国からシェフを招いて入院患者の皆様やご家族に普段と違った昼食を提供するという企画で、日本では本年度3施設のみ、病院としては昨年の鶴巻温泉病院に引き続いて2施設目の催しとなりました。

当日は7階会議室を会場として患者さん31人、ご家族12人の皆さまに参加いただき、参加できない患者さんに対しても当日専用のイベント食を食べていただきました。入院生活中のほんのひと時ではありましたが、このようなイベントで入院中のストレスを解消してもらい、食べることの喜びを



皆さんにご試食いただけないのが残念なよう

感じていただけただけではないかと思っています。

最後にこのイベントに携わっていただいた aim サービス、当院のスタッフの皆さまに御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

(近森リハビリテーション病院  
事務長補佐 松本充夫)



## 映画「バルトの楽園」の舞台へ

映画の舞台、第一次世界大戦中の鳴門市の板東俘虜収容所。映画は松江収容所所長や、俘虜のドイツ兵と地元民の交流を描いた。所長は人道的な扱いに心がけ、被収容者による楽団が『交響曲第9番 歓喜の歌』を日本で初めて演奏したとされる。



スペースの都合で一部しかお見せできませんが、絶品で…

## 職員旅行

2006

Vol.2の2

優雅に…



出張報告 ● JMDS (Japan Medical Dietitian Society) 2006 in うつくしま福島  
(栄養士)

# 成長につながると実感できる会

2006年9月16日から2日間に亘り、Japan Medical Dietitian Society (以下 JMDS・日本メディカルダイエティシアン研究会) 2006 が福島県郡山市で開催された。

近森リハビリテーション病院 栄養科  
管理栄養士 西岡心大<sup>しんた</sup>



▲ JMDS 会長を務める近森会栄養科の宮澤靖科長が「急性膵炎の病態と栄養管理」と題し初日に講演を行なった

JMDS は臨床栄養を学ぶ有志によって設立された研究会で、年1回学術集会が催されている。今回初めて参加さ

せていただいたが、学術発表のほかにユニークな企画などもあり、有意義な2日間となった。



## うちの癒し系 ▶ ぶんしち

近森リハビリテーション病院  
言語療法科

高橋 梨奈



私の家で飼っているチンチラねずみの『ぶんしち』(おそらくお)です。私の家に来てから、かれこれ4年も経つのにあまり慣れず、捕まえようとすればケージの中を逃げ回りケージ掃除のときはいつも格闘です。夜行性ということもあり、飼い初めはその音に起こされることもしばしばありました(今では音にも動じず、ぐっすり寝てますが...)。しかし、足を伸ばしきって寝ている姿勢は愛嬌があり、ふわふわの毛並みは私にかなりの癒しを与えてくれています。

## わたしの趣味



第二分院5階病棟看護師 和田 晴栄

美とか「カッコ良さ」に興味がありますし、気晴らしになることも好きです。それがバイクであり、3歳頃からずっと鳴子を持って夏はよさこい一色に染まってきた!という感じでしょうか。

前の職場を退職して近森会に就職するまで短い期間しかなかったけれど大型バイクの免許が取れました。中央自動車学校ではとくに二輪の先生に根気よく教えていただきお陰で取れたと感謝でいっぱい。雨の日にカッパで汗だくになったり転倒してバイクを变形させたりと苦労も多かったけど、挑戦すれば何とかできる!という経験は自信に繋がりました。いまの最大の楽しみがバイク。朝日を背に西へ走り、夕日を背に帰宅。風を切る爽快感、これはクセになりますね・笑(談)。



## バイク

ツーリング仲間と走ってきて、こらでちょっと一休み中の私なんです!



バイクの専門誌に掲載されたすぞくマニアックな、「晴ちゃん号」は、2006年モデルが売り切れで諦めきれず2007年モデルを松山で手に入れた! XL1200L



▲ 帰路、郡山駅で左に筆者の西岡心大さん、右に講師を務めた栄養科の宮澤科長

まず初日は一般口演が行われ、近森会から11題の発表があった。とくに初めての学会発表となる私も含めた新人スタッフが多く、時に鋭い質疑応答が行われ、今後の成長につながる貴重な経験であったと感じている。その後、JMDS会長の宮澤靖栄養科長より「急性膵炎の病態と栄養管理」と題した講演が行われた。急性膵炎の栄養管理法については近年大きく変化し、早期経腸栄養を開始した方が予後は良好であるとの最新文献などが紹介された。

2日目は、「Let's enjoy Nutrition Care with Dr. 雨海」と題し、臨床栄養の分野で日本のみならず海外でも活躍されている、茨城県立こども病院小児外科部長・雨海照祥先生による、バーチャル症例への栄養管理法を検討する参加型のワークショップが催された。ここで採り上げられたのは前日の講演と同じく急性膵炎の症例で、前日の講演内容を復習しながら学ぶことができ、予定時間はあっという間に過ぎ、福島での2日間は幕を閉じた。

JMDSを振り返ると、多くの経験を通じて自分自身の至らない点を多々感じた面もあるが、他施設の先生方との交流はたいへん刺激となり、向上心をかき立てられたというのが実感である。

今後、質の高い栄養管理が患者さんにフィードバックできるよう、これまで以上に努力してゆきたい。

## 久しぶりのシリーズ復活・職場訪問 ● 企画情報室

このたびの近森会を挙げての「電子カルテ導入」プロジェクトは、各部署それぞれの皆さまの努力のおかげで、少しずつ軌道に乗ってきています。そこで、今回は電子カルテの牽引役を務める企画情報室の皆さんに、近況やプロジェクトに関わる感想を寄せていただきました。難問に頭を抱えることもまだまだ多いようですが、せめて『ひろっば』の撮影ではガス抜きを…ということで、楽しい場面が撮れました。(『ひろっば』編集室)

## 皆さま、今後とも「電子カルテ」にご協力よろしく願いいたします。

※写真の順に五言コメントを掲載します

11月16日付で医事課より企画情報室に異動となりました。電子カルテ導入時期の激務は未経験で、これから企画情報室の業務を把握して信頼はもとより、第一線で活躍できるようになりたいと考えています。

しかしながら今はまだ足枷にしか過ぎませんが、医事課や企画情報室といった角度からの目線で物事を捉え、さまざまな分野に貢献したいです。これからますます情報システム化が進む中での確かな情報を吸収して医療現場の支援となるようにしていきたいです。まずは専門用語から…。(隅田 誠)

職員の皆様には大変なご迷惑をおかけいたしました。準備段階では、大勢の方にかかなりの時間を割いていただき、ご意見を頂戴することで出来るだけ現場が使いやすいシステムになるよう努力してまいりましたが、稼働後に使用していくなかで、やはり種々の問題点があがってきております。

これらの問題の解決とともに、心カテ動画システムなど、今後稼働の始まるシステムもできるだけ早く、且つすぐに使えるシステムとして、診療現場の皆様にもシステムを最高の道具として使っていただけるよう、今後も努力してまいりたいと思います。

(宗石 勤九郎)

どうなるんだろう、電子カルテも私達も……とにかくまともに動いて!と思いがからこの数か月を乗り切ってきたように思います。その電子カルテもなんとか軌道に乗れ、少しずつ機能もアップしながら、動いています。ホッとした気持ちでいて下さる方、コンピュータがますます嫌になってしまってる方、いらっしやと思います。色々な話を聞かせて頂くにつけ、それだけ現場には欠かせないものになっていることを実感させられ身の引き締まる思いです。

緊張と緩和、何かにつけふと思う言葉です。どちらかばかりでもダメ、両方をバランスよく取り入れていくことでうまくいく。稼働前にもよく思いました。張り詰めた自分の気持ちの切り替えをするため友人と話したり、ブラッと出かけたりにして、気分転換して戻ってきました。よしまた頑張れる!

情報室スタッフも適度な休みを取りながら壊れることなく動き続けられることを願いつつ、現場に還元できるシステムづくりをしていきたいと思っています。(上田礼子)

1999年8月に汎用機からPCサーバによるオーダーリングシステムへ移行し、医師によるオーダーリングが始まりました。それ以降、将来的には電子カルテを導入する方向でメーカーと検討していましたが実用レベルに程遠く導入を見合わせてきました。



後列左端の隅田誠さんから時計回りに、宗石勤九郎さん、上田礼子(ひろこ)さん、長山信夫主任、中山潤一さん、濱田亜矢子さん、公文幸子さん、重森英樹さん

10月稼働が決定してからは、劣化してきたプリンタやディスプレイの交換などハード面の準備や看護システムの入替え・電子カルテ・PACSバージョンアップ等のソフト面の準備や打ち合わせの連続で休む暇がなかったように思います。

今後も生理検査部門システムや循環器動画システムの導入を予定しております。電子カルテになって医師や各部署からの要望が数多く寄せられております。要望には可能な限り応えられるように努力していきたいと思っています。(長山信夫)

この電子カルテが本稼働したことにより、院内の端末であればどこでもカルテを開くことが可能になります。また、今回はカルテの電子化だけではなく、従来、手書き運用の紹介状の作成もカルテ同様に電子化になったことも大きな特徴です。

他にも紹介状登録システムや診療録システムが一新し、システムだけではなく、端末台数の大幅な増設、画像参照用液晶ディスプレイの設置などハードウェアも大きく様変わりしました。電子カルテ本稼働開始時に企画情報室の一員としてシステム準備に携わることができたことにより、今まで以上に62次CMISシステムを稼働前より深く知ることができました。(中山潤一)

電子カルテ稼働準備を振り返って感じたことは相手に伝えることの難しさでした。

主に文書管理、スキャナ、連携システム窓口で初めてのことはばかりが頭の中を渦が巻く状態で、自分の知識不足と自分の観点からしか物事が見えていない状態だったので、新しいシステムにどんな機能が備わって、どういう風に活用できるかを表面的な切り口でしか話をすることができず、現場の先生方や他部署の方がそれを聞いて疑問に感じたことや、どう役立てられるかについてのアドバイスも、あまりできず時間が過ぎてきました。

今後も引き続き電子化という名の旅はま

だまだ続きますが、色んな提案や意見が飛び交うなか、一番大事なことってなんだろう…?と自問自答しながら「電子化になってよかった」と一人でも多くの人が思えるような支援をしていきたいと思ひます。

(濱田亜矢子)

10月1日の電子カルテ本稼働までの二週間は、帰宅が毎日遅く、文字通り、帰るとそのまま布団に倒れ込むという生活でした。過ぎてみればあつという間だった気もしますが、電子カルテ導入という病院が大きく変化する場に立ち会う機会をいただき、医療という仕事のあり方、また自分自身のあり方についても考えさせられることが多かったです。導入後は概ね大きな混乱もなく、障害や質問、要望の電話も最近は徐々に落ち着いて来た印象です。

タイトなスケジュールの中での新システム導入と運用変更にもかかわらず、職員の皆様の前向きに学び、操作訓練に取り組まれている姿を見るたび本当に頭が下がる思いでした。(公文幸子)

施設用度課から企画情報室へ異動になったのが、電子カルテ導入2ヶ月前の8月のことでした。急に配属が変わることになって、情報室がどんなことをしているか詳しく知らなかったので多少の不安はありましたが、くよくよ悩んでも仕方がないと前向きに考えるようにしていました。

異動になってからは不安を感じる暇もなく、日報作成や日々発生する障害の対応などの日常業務と、操作訓練の立会いや予約調整、端末やプリンターの設置などの電子カルテ化への準備に追われる充実した毎日でした。

電子カルテ導入に際し一番苦しい時期を乗り越えた経験は自分にとってかけがえのない財産になりました。今後は情報室の先輩方にフォローされるばかりの自分ではなく、情報室として必要とされる一員になりたいと思ひます。(重森英樹)

シリーズ●クリニック探訪21

http://www.myclinic.ne.jp/moegi/

もえぎクリニック

tel.0887-57-3050 fax.57-3066

〒781-5310 香南市赤岡町 2066 番地 3



※このロゴマークは、3つのC (Care, Cure, Control) からアレンジし、新芽の色とその伸びる様子をイメージしています。

診療科目 ●内科、胃腸科、循環器科、リウマチ科 (新設!)

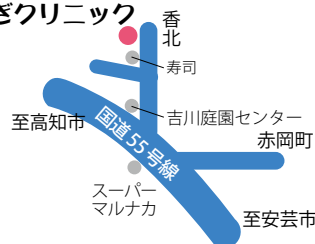
診療時間 ●8:40 ~ 12:30  
13:30 ~ 17:20

休診 ●日曜、祝日

◀左から、Dr千々和龍美/院長・久武邦彦 (S28.11.5 高知市生まれ) / 副院長・岡林智明 (S38.10.11 高知市生まれ)



もえぎクリニック



当院は、2001年1月に開院した内科の有床診療所です。翌年血液透析を開始。本年3月にはリウマチと腎臓病を専門とする千々和龍美医師が加わり、医師3名で地域の皆さんの「おらんくの診療所」をめざして頑張っています。

名前の由来は、副院長夫人の「若葉の萌えいつる感じ、もえぎ」のアイデアに、久武院長が「それがいいね〜」で、サッと決まったんだそうです。(編集室)

図書室便り (管理棟図書室 10月受入分)

- ・写真集 リスボンの3日間 / 山本 彰 《別冊・増刊号》
- ・臨床放射線 51巻 別冊 放射線治療のすべて 局所限局前立腺癌を中心に / 青木 学 (他編集)
- ・別冊 整形外科 No.5 脊椎疾患における鑑別診断と治療法選択の根拠 / 四宮謙一 (編集)
- ・別冊 医学のあゆみ 消化器疾患・肝・胆・膵一state of arts ver.3 / 竹井謙之 (他編集)
- ・別冊 NHK きょうの健康 前立腺肥大症・前立腺がん / 松島正浩 (総監修)
- ・月刊 保団連 臨時増刊号 No.911 特集 在宅医療点数の手引 診療報酬と介護報酬 2006年度改定版 / 全国保険医団体連合会 (編集)
- ・JIN スペシャル 79 実践 肝疾患ケア / 池田健次 (他編集)
- ・日本医師会雑誌 第135巻・特別号 (2) 生涯教育シリーズ 70 最新 臨床検査のABC / 橋本信也 (監修)
- ・精神科治療学 vol.21 増刊号 症状性 (器質性) 精神障害の治療ガイドライン / 「精神科治療学」編集委員会 (編集)
- ・インфекションコントロール 2006年 秋季増刊 ICTならこれだけは必須 感染対策にすぐ使える臨床微生物の基礎知識 / 奥住捷子 (他編集)
- 《ビデオ・DVD》
- ・VIDEO JOURNAL of Japan Neurosurgery Vol.14.No.4 / 日本脳神経外科学会 (監修)

● 12月の歳時記 ●

水仙 (ナルシサス)

文 SRL 検査室 臨床検査技師 竹村 美紀

水仙は別名「雪中花」とも呼ばれ、語源は中国の古典「天仙、地仙、水仙」の水仙 (水に住む仙人) の音読みから来ています。

また西洋では美少年ナルシスが泉に映る自分の姿に恋焦がれ、そのまま花になってしまったのが水仙であるというギリ

シャ神話もあります。

自分の美貌に酔いしれる人を「ナルシスト」と呼ぶのもここから来ています。

水仙や寒き都の  
ここかしこ 蕪村

画 千光士可苗



10月の診療数

近森会 外来患者数	19,549人
近森会新入院患者数	846人
近森会 退院患者数	855人
地域医療支援病院紹介率	81.72%
近森病院平均在院日数	14.93日
近森会 平均在院日数	22.06日
近森病院救急車搬入件数	436件
うち入院件数	204件
手術件数	280件
うち手術室実施	230件
全身麻酔件数	118件

企画情報室より

お知らせ

第16回 近森病院クリニカルパス大会

テーマ: 急性冠症候群 (ACS)

トピックス: ACSの

クリニカルインディケイター

日時: 平成18年12月9日 (土)

場所: 高知城ホール

☎診療情報管理室内クリニカルパス事務局 (088-822-5231) まで

編集室通信

▼職員旅行で大阪道頓堀クルーズに参加した。知らない街に行く予定が、過去に数年間過ごした良く知る街となってしまったにもかかわらず、川から見る風景はまた一味違うものであった。下船してコテコテの街を楽しんだが何だか酔いもあって (船酔いではないが)、違う街に来ているような錯覚さえあった。年に一度リフレッシュさせてもらえる機会を与えられていることは本当にありがたいことと思っています。(裕)